

人類はウィルスの呼びかけを聞くか

ながれ

工藤 泰子 (くどう たいこ / 一般財団法人日本気象協会)

今、時代は「VUCAの時代」なのだそうだ。VUCAとは、「Volatility (激動)」「Uncertainty (不確実性)」「Complexity (複雑性)」「Ambiguity (不透明性)」の頭文字で、おおざっぱに言うと、事態は急速かつ大きく変動し、先のことは不確実で見通しがたたず、「まさか」が頻発。グローバリゼーションと技術のイノベーションは加速し、関係性は枠組を超えて複雑化し、絶対的な解決策はなく何が正解になるかもわからない、といったところだろうか。もはや「安泰」はなく、世界は様々なリスクと不安にまみれている。

人類を翻弄するそんな時代を作り出したのは人類自身に他ならない。ホッケースティック状の加速度的変化を示しているのはCO₂濃度だけではない。熱帯林の減少や絶滅種の数など地球環境指標は軒並み似たような形で急速に増大している。これをもたらしているのが人間であることは、人口やGDP、水利用、自動車の数などの人間活動指標がやはり同様のカーブを描いて急増しているのを見ればおのずと納得がいく。このような変化が持続可能だと思う人は一人もいないはずだ。いずれホッケースティックの柄はどこかで折れるだろう。人類世 (Anthropocene) と呼ばれるこの時代、人類は地球システムを大きく変えてしまい、気候変動や生物多様性の損失は取返しのつかないレベルに達しつつある。

ウィルスがもたらしたもの

わかっていても止められないのが人類。地球環境の危機が叫ばれてからすでに久しい。「かけがえのない地球」をテーマとしたス

トックホルムの国連人間環境会議から48年、12歳のセヴァンが「直し方のわからないものを、これ以上壊すのはやめてください」と訴えたりオの地球サミットから28年。それでもやはり人類は経済最優先を変えることはなかった。そして、一昨年15歳のグレタのたった1人の学校ストライキから始まって世界にクライメートアクションの大きなうねりが巻き起こったとき、今度こそ世界は変わるかも、そんな希望が湧いてきた。そんな矢先、新型コロナウイルスは現れた。

人々は、当初事態を侮り、そのうち感染拡大は収まるだろうと楽観していたのだと思う。しかし、時代はVUCAである。このウィルスは症状がなくても感染力を持つというそのステルス性において、これまでとは違う脅威をもたらした。瞬く間に感染は世界に拡大し、感染者は2020年7月1日現在で累計1,000万人を超えている。ワクチンもないため、感染拡大を抑えるには人と人が距離をとり、人や物の移動を制限するしかない。世界の多くの都市がロックダウンし、これまで見たことのないゴーストタウンのような光景が広がった。これはこれで心が痛んだ。

しかし、国境が閉鎖され、人々が家にいることを強いられた結果、飛行機や自動車、工場等からの汚染物質の排出が減少した。それによって、インドから数十年ぶりでヒマラヤが見え、中国でも大気汚染レベルが著しく低下したという。やればできる。

ではCO₂はどうか。イーストアングリア大などのチームが英科学誌Nature Climate Changeに発表した論文の推計によれば、世界で1日に排出される量は今年4月初旬、

2019年の平均値より17%減少したとのことだ。国際エネルギー機関（IEA）も、2020年のエネルギー関連のCO₂総排出量が、前年比8%減になる見込みとの推計を発表した。

世界中でこれほど厳しく活動が制限されているのだから排出量も激減するだろうと期待していただけに、この程度しか削減できないという数字に、パリ協定の目標達成がいかほど厳しいものかを痛感させられた。国連環境計画（UNEP）の2019年版排出ギャップレポートは、温暖化を1.5℃に抑えるには2020～2030年に年7.6%、2℃に抑えるには年2.7%のペースで排出削減が必要があるとしている。新型コロナウイルスの出現によって私たちは図らずもホッケースティックの柄を折ることになり、1.5℃目標を達成するための約8%削減がどれほどのものかを実際に体感している。地球温暖化を抑制し持続可能であるために排出削減は必須だが、活動量の低減だけでそれを成し遂げようとする私たちのくらしや経済への影響があまりにも大きく、この状態が長く続くこともまた持続可能だとは言えない。大きなジレンマだ。

私たちはどんな未来に向かうのか

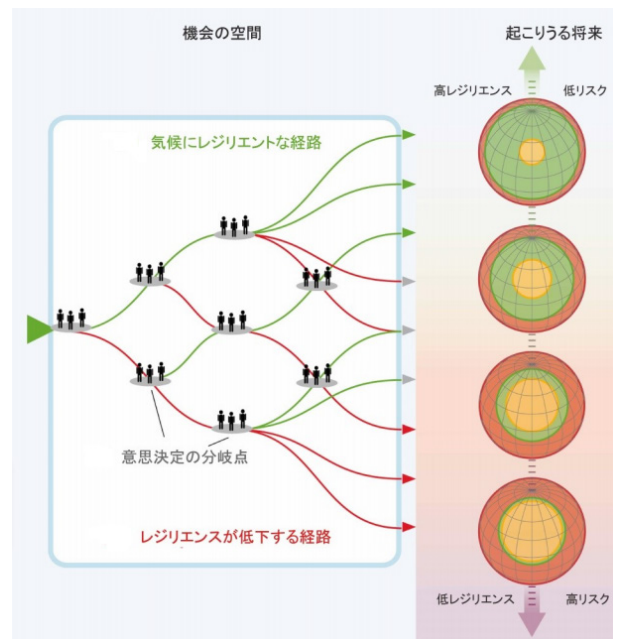
図は、IPCC第5次評価報告書第2作業部会政策決定者向け要約の図を部分的に引用したものである。人類は今、分岐点に立たされている。レジリエンスが低下しリスクが高まる安易な下降経路を選ぶか、苦労は大きくてもレジリエンスを高めリスクを低減する上昇経路を選ぶか（たとえばグリーン・リカバリー）で、起こりうる将来は大きく変わる。この図をよく見ると、いくつもある意思決定の分岐点で安易な下降経路を選び続けると挽回できない、すなわち手遅れになってしまう状況に陥ってしまうこ

とがわかる。現在がすでに手遅れになっていないことを願うが、もうぎりぎりだ。

このコロナ禍を、これまで変われなかった人間活動の在り方を変革する最後のチャンスと捉え、あえて厳しく険しい経路へ大きく舵を切ることができるかどうか、それがVUCAの時代の人類の持続可能性を左右するのではないだろうか。

人間は1人では生きていけない生物だ。その人間をこのウィルスは物理的に引き離れた。突然もたらされたその現実で、いかに人のつながりが大事だったか、家族や友人という何の変哲もない日常というものがいかにいとおしいものだったか気づいた人も多いと思う。

「今だけ、カネだけ、自分だけ」から「今より、カネより、自分より」大切なものがあると気づき、大切なものために試練に向き合い連帯して行動することが原則になったら、きっと人類は持続できる。無理やりにでも、そう信じないと私は生きていけない。



図：起こりうる将来に導く意思決定の分岐点と経路
(IPCC第5次評価報告書第2作業部会政策決定者向け要約の図SPM.9の一部)